

3 愛宕塚古墳出土の鏡について

本鏡は面径7.2cm、古墳時代前期の小形倣製鏡の一種である。縁から順に素文縁（平縁）、直行櫛歯文帯、三重の圈線、四単位の主文様、さらに二重の圈線を経て鈕にいたる。4単位の主文様はやや細身の線式で変形のS字状文ないし蕨手状文で意匠自体が非常に崩れている。倣製鏡においてここまでデフォルメされた文様の祖型を追求することは容易なことではない。またその追求自体それほど歴史的あるいは技術的に意味をもつものとは思われない。製作者はおそらく4単位の主文様は何を表現したものであったかについては全く無頓着であつたろう。もちろん使用時においても同様であり、鏡それ自体に意義があつたのであろう。しかし、ここでは先学に導かれながら、本鏡の祖型になった可能性のある鏡及び類似例をあげ、若干の検討を加えることによって本古墳の歴史的な位置づけを考えるささやかな一要素としてみたい。

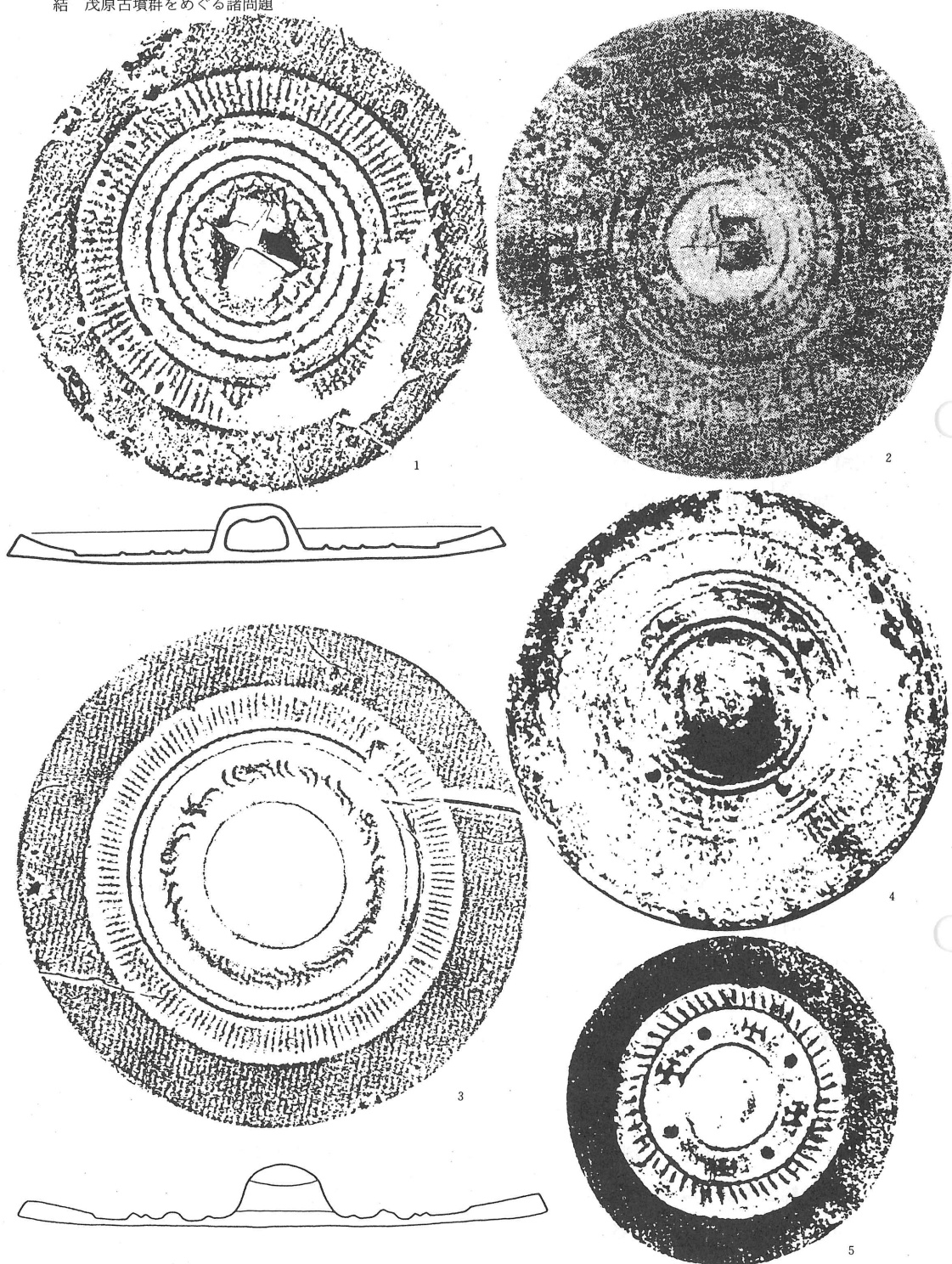
中国鏡あるいは先行する弥生時代の小型倣製鏡で4単位の変形S字状文をもつ鏡としては

- ① 四蛇鏡^{註1}（蟠蛇文鏡・虺龍文鏡・四虺文鏡）
- ② 四螭文鏡^{註2}
- ③ 四獸文鏡
- ④ 弥生時代の「S字状文倣製鏡」^{註3}

があげられる。

まず④については高倉洋彰氏の論考^{註3}があり②四螭文鏡には内行花文がみられること、①四蛇鏡には通常四乳を配することに注目しつつ「四乳四S字状文の完成には、四蛇鏡が大きく寄与しているものの、その基盤は内行花文日光鏡系の倣製鏡にある」としている。意匠が酷似する②四螭文鏡の影響についてはこの鏡が前漢の初めから中期と年代が古過ぎること、その間をつなぐ鏡がないこと、国内で出土していないこと、以上3点を理由に排除している。愛宕塚鏡と①四蛇鏡・④「S字状文倣製鏡」の間には後二者が乳をもち櫛歯文が斜行するのに対し前者は乳を欠き櫛歯文も直行する点で大きな差異をみせる。また④「S字状文倣製鏡」は一例を除き内行花文を伴うとされており明らかに祖型とは考えられない。しかし、「日光鏡の仿製は、文字の抽象化が獸形文、S字状文などを生み、銘文の字間の渦文が蕨手状文を発生させた」^{註4}とすれば愛宕塚鏡が日光鏡のモチーフの末裔である可能性は残されている。③四獸文鏡については可能性があるがあまりにも「獸」が形骸化しており彼我を結び付ける論証は難しい。祖型となった鏡を確定することは予想どおり難しいのでいったん視点を変え、類似例について検討してみたい。

東国出土の本鏡に類似する例としては茨城県勅使塚古墳出土の重圈文鏡^{註6}があげられる。面径7.8cmでやや幅広の素文縁（平縁）で直行櫛歯文帯をもち三重圈線を主文様とする。愛宕塚鏡の内区の四単位変形やS字状文を除けば大きさ、意匠ともよく似ている。重圈文鏡^{註7}については小林三郎氏の論考^{註8}があり「古墳時代倣製鏡としては初現的」とされる。さらに重圈文鏡の「母型」としては「前漢代に製作されたであろう「日光鏡」や「明光鏡」の類あるいは「四蛇鏡」と呼ばれ



1. 茨城県勅使塚古墳出土 2. 栃木県足利市藤本地内出土 3. 栃木県朝日観音1号墳出土 4. 大阪府御旅山古墳出土 5. 大阪府亀井遺跡出土

第120図 愛宕塚古墳出土鏡関連鏡 (S = 1/1)

るような類のものでなかったか^{註8}と推定している。年代については古墳出土の6例、集落出土5例をあげ、初期の古墳及び弥生時代最終末～土師式土器の初期の集落から出土しているとする。その後の集成を経た見解もほぼ同様である。前記した勅使塚古墳の他に三重県嬉野町向山古墳、大阪府富田林市板持3号墳、愛媛県今治市雉之尾1号墳（第18表）と前期古墳それも愛宕塚古墳と同じ前方後方墳から出土していることが注意される。^{註10}現段階では、愛宕塚鏡を重圏文鏡と同系列の鏡として理解することはそれほど的外れではなかろう。一部残る変形S字状文は大阪府御旅山古墳の重圏文鏡にみられる四乳とともにその祖型として四蛇鏡ないし日光鏡をあてる小林氏の見解が正鵠を得ていることを示すものと思料される。ひとまず愛宕塚鏡を重圏文鏡の系統で理解する立場に立ってその系譜についての先学の研究を再び瞥見してみよう。

小林氏は「重圏文鏡が小形の内行花文鏡などと共に弥生時代からの「小銅鏡」の系列の中にあるらしい」と推定しさらに珠文鏡の一部（A類）も同列に扱った。^{註8}その後ややニュアンスを変え古墳時代初期の段階の小形の倣製鏡は「弥生時代小形倣製鏡群と直接的に系譜をたどることのできる材料は無いと云ってよい」あるいは「直接的に関連しないだろうと推測される^{註12}」とする。

一方高倉氏は、重圏文鏡の祖型として「平縁の幅広化した重圏文日光鏡を原鏡として瀬戸内～近畿で独自に鑄造されたと考えられる」重圏文日光鏡系倣製鏡（第Ⅲ型b類）を考えている。^{註4}大阪府鷹塚山鏡（弥生後期終末）を初期のものとし、斜行櫛歯文の直行化、鈕の周囲の櫛歯文帯の省略、面径の縮少が進み最終的には櫛歯文鏡への変容を想定する。なお、製作地については予察的に「近畿一带と考えることも可能」としている。先行する論文の中では弥生時代末から古墳時代初頭の「小形倣製鏡」に関して「各地の古墳時代倣製鏡の技術的基盤をなし、相互に密接な関係を有する^{註13}」と述べ小林氏とはやや見解を異にする。^{註14}

森岡氏は高倉氏の業績を継承しつつ弥生時代から古墳時代前期の倣製鏡を4期区分した。^{註15}第1期（弥生後期初～前半）、第2期（後期中頃～後半）は北九州に制作の中心があり第3期（後期終末）、第4期（古墳時代前期）は「倣製第3期の鏡づくりの主役はあくまで近畿弥生人と思われ、古墳時代には小形鏡の製作を受継いだ^{註16}」とする。ここで注目しておきたいのは第4期において畿内が「重圏文系の小形鏡製作を一つの柱^{註15}」としていたと推定している点である。愛宕塚鏡を理解するための重要な視点と思われる。

管見ではあるが、前方後方墳から出土する鏡を一覧（第17・18表）するとおおまかに類型化が^{註17}可能である。つぎに時間軸を加味して検討すべきであるが筆者の力量の及ぶ所ではない。また前方後円墳など他の墳形の前期古墳出土の鏡を集成して比較検討し、前方後方墳出土鏡の特質を見出すべきであるがこれも現段階では無理である。ただし集成作業段階では小形倣製鏡を副葬する比率が前方後円墳に比べて大きいように思われた。舶載か倣製かあるいは鏡種の違いを畿内との関係の反映とする立場に立てば前方後方墳の被葬者は「疎」ということになる。しかしその内部にも鏡の組成に差異がある。三角縁神獣鏡を副葬する古墳が13もあり前方後円墳の被葬者と同等あるいはそれ以上のつながりをもつ首長も想定される。ただしこの場合、築造時期の違いを十分

No	古墳名	所在地	墳長	埋葬施設	鏡式	面径	做舶	備考	文献
1	茂原愛宕塚古墳	栃木県宇都宮市茂原町御馬前	50	木棺直葬	(小形做製鏡)	7.2	做		本書
2	〃大日塚古墳	〃	36	〃	素文鏡	2.4	〃		〃
3	那須八幡塚古墳	〃小川町吉田・八幡	(68)	〃	鏡鳳鏡	12.6	舶		1
4	駒形大塚古墳	〃三輪・駒形	64	木炭槨	面文帯四獣鏡	13.2	舶		2
5	下侍塚古墳	〃湯津上村湯津上	84	粘土槨?	盤竜鏡		做		3・4
6	上侍塚古墳	〃	114	〃?	振文鏡		做		〃
7	山王寺大姥塚古墳	〃藤岡町姪沼	98	鹿沼土槨	四神像鏡	12.3	做		5
8	元鳥名將軍塚古墳	群馬県高崎市元鳥名町將軍塚	95	粘土槨	四獣鏡	7.1	做		6
9	北山茶臼山西古墳	〃富岡市南後箇169	28	木棺直葬	方格規矩鏡他1	15.9	做	変形四獣鏡(9.7)	7
10	(下佐野遺跡A区4号)	〃高崎市下佐野町	25.9	不明	内行花文鏡	8.0	做	周遑中出土	8
11	桜塚古墳	茨城県つくば市水守・桜塚	30	粘土槨	変形四獣鏡	13.5	做		9
12	勅使塚古墳	〃玉造町沖州・下組	64	木棺直葬	重圈文鏡	7.8	做		10
13	丸山1号墳	〃八郷町柿岡	55	〃	内行花文鏡	8.2	做		11
14	新皇塚古墳	千葉県市原市菊間	40	粘土槨	内行花文鏡(北)	10.2	做	珠文鏡(南) 7.3	12
15	鳥越古墳	〃木更津市大田・鳥越	25	木棺直葬	方格規矩鏡	11.2	做		13
16	砧中学校7号墳	東京都世田谷区成城1丁目	65	粘土槨	乳文鏡	4.8	做		14
17	真土大塚山古墳	神奈川県平塚市大野町真土		〃	三角縁神獸鏡他1	22.1	舶・做	四獣鏡(7.75)	15
18	小平沢古墳	山梨県中道町上向山	52	不明	斜縁二神二獣鏡	13.2	舶		16・17
19	弘法山古墳	長野県松本市出川丸山	63	磯槨	四獣鏡	11.65	舶		18
20	牛王堂3号墳	静岡県清水市庵原町	78.2	粘土槨	三角縁神獸鏡	22.5			19
21	東之宮古墳	愛知県大山市北白山平	75	竪穴式石室	三角縁神獸鏡5他6		舶・做	(注2)	20・21
22	宇都宮古墳	〃小牧市小木	62	〃	三角縁神獸鏡	21.8	舶		22
23	北山古墳	岐阜県大野町上磯	83	横穴式石室	内行花文鏡	12.8	舶		23・24
24	粉糠山古墳	〃大垣市青墓町・小金	100	不明	乳文鏡		做?		25
25	高塚古墳	〃〃矢道町・権現前	58	竪穴式石室	三角縁神獸鏡	19	做		26
26	西寺山古墳	〃可児市中恵土	(60)		〃(?)				27
27	東寺山1号墳	〃御嵩町伏見・土居内	(41)	粘土槨	四獣鏡				27
28	向山古墳	三重県嬉野町上野・松阪市小野	71.4	粘土槨	内行花文鏡他3	6.9	做	重圈文鏡・振文鏡2	28

第17表 鏡が出土した前方後方墳一覧(1)

No	古墳名	所在地	墳長	埋葬施設	鏡式	径	倣	備考	文献
29	筒野1号墳	三重県嬉野町一志・筒野	39.5	粘土槨	三角縁神獸鏡2他2		倣	位至三公鏡・四獸鏡	28
30	国分尼塚1号墳	石川県七尾市国分町ノ部	53	〃	龍鳳鏡	15.7			29
31	国分尼塚2号墳	〃	33	木棺直葬	(小形倣製鏡)	10.1	倣		29
32	長法寺南原古墳	京都府長岡京市長法寺南原	58~60	竪穴式石室	三角縁神獸鏡4他2		倣	盤竜鏡・内行花文鏡	30
33	芝ヶ原古墳	〃 城陽市寺田大谷	後方部21	木棺	四獸形鏡	12.0	倣		31
34	板持3号墳	大阪府富田林市板持	(40)	粘土床	重圈文鏡	8	倣		32
35	西山古墳	奈良県天理市杣之内町	183	(竪穴式石室)	神獸鏡他1			鏡式不明	33
36	新山古墳	〃 広陵町大塚・新山	127	竪穴式石室	三角縁神獸鏡9他25		倣	(注3)	33
37	新沢千塚109号墳	〃 橿原市川西町カサ松	28	木棺直葬	画文帯神獸鏡他2	20.9	倣	珠文鏡・変形獸文鏡	34
38	権現山51号墳	兵庫県揖保郡御津町中島	(43)	竪穴式石室	三角縁神獸鏡5		倣		35
39	普段寺1号墳	鳥取県西伯郡会見町天方	23	木棺直葬	三角縁神獸鏡	23.5	倣		36
40	薬師山古墳	島根県松江市西川津町・前菅田	不明	不明	四乳鏡	9.5	倣		37
41	金崎1号墳	〃 〃 〃 金崎	36	竪穴式石室	内行花文鏡	6.9			37
42	松本1号墳	〃 三刀屋町給下	50	粘土槨	獸帯鏡	13	倣		38
43	岡田山1号墳	〃 松江市大草町・有	24	横穴式石室	内行花文鏡	10.6	倣		39
44	古天神古墳	〃 〃 〃 杉谷	27	石棺式石室	変形五獸鏡	13.6	倣		40
45	御崎山古墳	〃 〃 〃 御崎	40	横穴式石室	珠文鏡	8.2	倣		41
46	備前車塚古墳	岡山県岡山市四御神・湯迫	48.3	竪穴式石室	三角縁神獸鏡12他1		倣	内行花文鏡	42・43
47	七つ坑1号墳	〃 〃 津島・西坂	45.1	〃	龍鳳鏡・方格規矩鏡			変形獸帯鏡(第二)	44
48	用木3号墳	〃 山陽町河本・野山	42	木棺直葬	四獸鏡	15.3	倣		45
49	久米三成4号墳	〃 久米町中北下・三成	35	箱式石棺	変形四獸鏡	12	倣		46
50	下原観音山古墳	〃 鏡野町下原・才の峠	51	竪穴式石室	三角縁神獸鏡他2	23	倣	米田方形帯神獸鏡 四獸鏡	46・47
51	岡高塚古墳	〃 勝央町岡・高塚	65(52)	〃	三角縁神獸鏡?				46
52	楠原寺山古墳	〃 美作町楠原下	54	〃	変形四獸鏡	13.8	倣		48
53	丹田古墳	徳島県三加茂町西庄茂山	(35)	〃	獸形鏡 or 神獸鏡	11.4			49
54	雉之尾1号墳	愛媛県今治市桜井国分	30.5	木棺直葬	重圈文鏡	5.7	倣		50
55	妙法寺2号墳	福岡県那珂川町恵子・妙法寺	18	〃	三角縁神獸鏡	21.9	倣		51

(注1) 17真土大塚山古墳・50下原観音山古墳については前方後円墳とする見解もある。なお、大阪府紫金山古墳については前方後方墳とする意見もあるが本表からは割愛した。

(注2) 方格規矩鏡1, 四獸鏡4, 三獸鏡1

(注3) 画文帯神獸鏡3, 方格規矩鏡4, 龍鳳鏡1, 直弧文鏡3, 内行花文鏡14

第18表 鏡が出土した前方後方墳一覧(2)

吟味すべきであることは改めて記すまでもない。前方後方墳の被葬者をおしなべて前方後円墳の被葬者の下位に置くことはやや短絡的にすぎる。集成作業を通して古墳時代前期における二重の意味で重層的な社会が想定された。

やや冗長に過ぎたきらいがあるが 1) 茂原愛宕塚鏡は重圈文鏡の範疇で理解される 2) 製作の中心は畿内地方であった可能性が強い。したがって愛宕塚鏡は畿内勢力との係わりで理解される 3) 主文様の変形S字状文は重圈文鏡の祖型を日光鏡ないし四蛇鏡にもとめる諸先学の見解が正鵠を得ていることの証左となる可能性がある。 4) 前方後方墳出土の鏡の集成から小形倣製鏡がかなりの割合でみられることが判明 5) 古墳時代前期における前方後方墳の被葬者にはそれぞれ畿内勢力との関係に違いがあり一律に扱うことは危険である。前方後円墳の被葬者との関係も勘案すると二重の意味で重層的な社会が想定される 以上5点を確認してささやかな検討結果としたい。

(註)

- 1 鏡の名称については研究者それぞれの独自の分類・命名があり、統一した呼称がなく混乱がみられる。本項では比較的研究者間で多く使用されている「四蛇鏡」を用いる。これは後藤守一が「変形蟠蛇文鏡」(『日本考古学大系 漢式鏡』雄山閣 1926年 第693図)とし、その後「四蛇鏡」(『古鏡聚英』上篇 1942年 図版第14の1)に改称した鏡式である。樋口隆康の「四乳虺龍文鏡」(『古鏡』新潮社 1979年 図版26・27)、澄田正一の「四虺文鏡」(「四虺文鏡について」『日本古文化論攻』吉川弘文館 1970年)と対応する。
- 2 高倉洋彰氏論文中の呼称(注3)に従った。ただし、この「四虺文鏡」という名称を①で示した「四蛇鏡」にあてる研究者もあり(『明治大学考古学博物館蔵品図録1 鏡』1988) 混乱は否めない。
- 3 高倉洋彰 1981「S字状文倣製鏡の成立過程」『九州歴史資料館研究論集』7 九州歴史資料館
- 4 高倉洋彰 1985「弥生時代小形倣製鏡について(承前)」『考古学雑誌』70巻3号 日本考古学会
- 5 同様な例は後藤守一が「獸形鏡(四獸鏡)」(前掲『漢式鏡』第321図)と判断したものや鈴鏡などにみられる。
- 6 大塚初重・小林三郎 1964「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』2-3 明治大学考古学博物館編1988『明治大学考古学博物館蔵品図録1 鏡』
- 7 小林三郎・清水康二両氏の御教示によると千葉県能満寺古墳出土鏡も類似しているとのことである。2面出土したうちの1面で報文(大塚初重1949「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第3冊)では獸形鏡とされ、面径8.6cm、三角縁の素文縁でその内側に櫛歯文帯、さらに2重圈線がめぐり主文様は「線描的な獸形」という。縁の形態は全く違うが意匠は類似するようである。残念ながら断面形のみで拓影等の提示はない。今回写真を提示していただいたが詳細については能満寺鏡の正式報告を待って検討したい。
- 8 小林三郎 1979「古墳時代初期倣製鏡の一側面」『駿台史学』46
- 9 小林三郎 1982「古墳時代倣製鏡の鏡式について」『明治大学人文科学研究所紀要』第21冊
- 10 栃木県内の出土例としては、足利市藤本地内出土鏡が知られる(山田郡教育会『群馬県山田郡誌』1939年)。現在確認できないが、図から判断して素文縁の内側に鋸歯文がめぐりその内側に三重の圈線がみえる。なお面径は二寸四分(7.9cm)、出土地は「矢場川村大字矢場藤本區古墳群中」で「内區の部に珠文、外區に鋸齒文だけ残れり」との説明がある。圈線は、小さな珠文が連続したようにみえる茨城県勅使塚鏡に類似するものであろう。足利市藤本町には古墳時代前期の前方後方墳である藤本観音山古墳があり、本鏡も矢場川(旧渡良瀬川)流域に営まれた前期古墳から出土したものと指定される。
- 11 『羽曳野壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報』1968

『南河内石川流域における古墳の調査』府報22 1970

なお、前段階に大阪府亀井遺跡出土鏡（高島徹他 1983『亀井』大阪府教育委員会）を想定すれば四乳の流れもスムーズであろう。

- 12 小林三郎 1989「小形内行花文鏡について」『下佐野Ⅰ遺跡 寺前地区(2)』群馬県教育委員会
- 13 高倉洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58巻3号 日本考古学会
- 14 両者の見解の相違は、高倉氏が技術的側面を重視するのに対し、小林氏が鏡の意匠、系譜自体を問題としたためと史料されるが本論から逸れるので言及は控えたい。
- 15 森岡秀人 1989「銅鏡」『季刊考古学』第27号 雄山閣
- 16 前項15に同じ。ただし「仿製第4期は国産小形鏡の一系でも断絶でもない複雑な様相を帯びる時期」とも述べ、断言は避けている。
- 17 大まかにはまず 1) 舶載鏡のみ 2) 舶載鏡+倣製鏡 3) 倣製鏡のみの3分類が可能である。さらにそれぞれ1面のみであるか複数副葬されたかの違い、面径5～8cmほどの小形倣製鏡の抽出、三角縁神獣鏡の有無及び倣製か舶載かを要素とすることができる。予察的には、築造時期・被葬者の性格を反映すると考えている。

(参考文献)

- 1 三木文雄・村井崑雄 1957『那須八幡塚古墳』吉川弘文館
- 2 三木文雄編著 1986『駒形大塚古墳』吉川弘文館
- 3 栃木県史編さん委員会 1976『栃木県史』資料編考古一 栃木県
- 4 斉藤忠・大和久震平 1986『那須国造碑・侍塚古墳の研究』吉川弘文館
- 5 前沢輝政 1977『山王寺大樹塚古墳の研究』早大出版部
- 6 田口一郎他 1981『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 7 田口正美編 1988『大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳』群馬県教育委員会
- 8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1989『下佐野遺跡Ⅰ地区 寺前地区(2)』群馬県教育委員会
- 9 蒲原宏行・松尾昌彦 1982「桜塚古墳」『筑波古代地域史の研究』筑波大学筑波古代地方史研究グループ
- 10 大塚初重・小林三郎 1964「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』2巻3号
- 11 後藤守一他 1957『常陸丸山古墳』丸山古墳顕彰会
- 12 斉木勝・種田吾吾・菊池真太郎 1974『市原市菊間遺跡』房総考古資料刊行会
- 13 梶山林継 1980「木更津市鳥越古墳の調査」『考古学ジャーナル』171 ニューサイエンス社
- 14 對比地秀行 1982「砧中学校7号墳」『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』世田谷区遺跡調査会
- 15 本村豪章 1974「相模・真土大塚山古墳の再検討」『考古学雑誌』60巻1号 日本考古学会
- 16 小林広和・里村晃一 1978「甲斐小平沢古墳の墳形と編年の位置」『信濃』30巻2号 信濃史学会
- 17 山梨考古学会編 1983『山梨の遺跡』山梨日日新聞社
- 18 斉藤忠他 1978『弘法山古墳』松本市教育委員会
- 19 清水市教育委員会 1974『午王堂山第3号墳予備調査概報』
- 20 高木志朗・宮川芳照・杉崎章 1968『上野古墳群』大山市教育委員会
- 21 伊藤貞樹 1972「尾張の大型古墳」『考古学研究』19巻2号 考古学研究会
- 23 東海古墳文化研究会 1988「岐阜県西濃地方の前方後方(円)墳の測量調査」『古代』86 早稲田大学考古学会
- 24 岐阜県立博物館 1989『特別展 濃飛の古墳時代』
- 25 中井正幸 1988「岐阜県粉糖山古墳」『日本考古学年報』39 日本考古学協会
- 26 中井正幸 1988「岐阜県西濃地方の前方後方墳」『古代』86 早稲田大学考古学会
- 27 長瀬治義 1988「岐阜県東濃地方の前方後方墳」『古代』86 早稲田大学考古学会

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

- 28 下村登良男 1981「南勢地方の大形古墳」『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会
- 29 和田晴吾 1984「石川県国分尼塚1・2号墳」『月刊文化財』254
- 30 都出比呂志 1983「長法寺南原古墳」大阪大学南原古墳調査団
- 31 川崎公敏・近藤義行 1987「芝ヶ原古墳」城陽市教育委員会
- 32 北野耕平 1967「富田林市板持古墳群調査概報」富田林市教育委員会
- 33 置田雅昭 1974「大和の前方後方墳」『考古学雑誌』59巻4号 日本考古学会
- 34 山田良三 1981「109号墳」『新沢千塚古墳群』奈良県立橿原考古学研究所
- 35 1989年3月12日付「毎日新聞」「読売新聞」等各誌
- 36 鳥取県埋蔵文化財センター 1988「特集 会見町普段寺1号墳出土の三角縁神獣鏡」『鳥取埋蔵文ニュース』No.19
- 37 松本岩雄 1983「寺床1号墳関連資料一覧」『松江考古』第5号 松江考古学談話会
- 38 山本清 1963「松本古墳調査報告」島根県教育委員会
- 39 島根県教育委員会 1987「出雲岡田山古墳」
- 40 松本岩雄 1983「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」Ⅱ 島根県教育委員会
- 41 三宅博士・松本岩雄 1982「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」Ⅰ 島根県教育委員会
- 42 鎌木義昌・近藤義郎 1968「備前車塚」『考古学研究』14巻4号 考古学研究会
- 43 近藤義郎 1986「備前車塚古墳」『岡山県史』考古資料編 山陽新聞社
- 44 近藤義郎・高井健司編 1987「七つ坑古墳群」七つ坑古墳群発掘調査団
- 45 神原英朗 1975「用木古墳群」山陽団地埋蔵文化財調査事務所
- 46 河本清・柳瀬昭彦 1979「久米三成4号墳」岡山県教育委員会
- 47 鎌木義昌 1964「岡山の古墳」日本文教出版株式会社 なお『岡山県史』では「郷観音山古墳」（全長43m，前方後円墳）との記載である。
- 48 近藤義郎 1986「橋原寺山古墳」『岡山県史』考古資料編 山陽新聞社
- 49 森浩一編 1971「同志社大学文学部考古学調査報告第3冊 丹田古墳調査報告」同志社大学文学部文化学科内考古学研究室
- 50 八木武弘 1986「雉之尾1・2・3号墳」『愛媛県史 資料編』考古 愛媛県
- 51 沢田康夫 1981「妙法寺古墳群」那珂川町教育委員会

4 土師器の系譜

愛宕塚古墳から出土した土器類は、墳裾、墳頂より転落した状態、周湊内に安置された状態で確認された。そこで、東側周湊くびれ部（G-B4）から出土した2個の壺（有段口辺壺と広口口辺壺で、同形同大の広口口辺壺は西側くびれ部からも出土している。）について、土師器の系譜を中心に編年的な位置付けについて検討する。

(1) 有段口辺壺形土器（第40図）

この土器は外反する口辺部を持つ壺である。筒状の頸部から段をもって広がりさらにそこから口辺部上面に綾杉の櫛目刺突文を巡らし、段部下縁にも櫛目の圧痕が施こされている。頸部には粘土紐をめぐらし斜めに櫛目文が施されあたかも綱を思わせる施文の土器である。有段口辺の壺は、桜井茶臼山古墳・箸墓古墳ほか、常陸狐塚古墳・佐自塚古墳・前橋天神山古墳・朝倉Ⅱ号墳・